

被爆の記憶

私が被爆したのは5歳9ヶ月の時でしたので多くを記憶していません。そのため、私は父や親戚から聞いた話を交えて被爆体験を話していますが、8月6日のことはかなり鮮明に覚えています。

私達家族は当初、神戸市に住んでいました。父は軍需工場に勤めており兵役を免除され、80歳の祖母と4人の子の世話のため家族とともに生活をしていました。

昭和20年に入ると、神戸市はアメリカ軍による度重なる空襲によって街を破壊され、私達の自宅も焼失しました。家財道具などすべてを失い、親戚を頼って広島に移住しました。その時の広島は空襲が無く、父は安全だと思ったのでしょう。広島では爆心地から約2キロの福島町に落ち着きました。

原爆が投下された8月6日は、父と兄は20キロほど離れた郊外の兄の疎開先に行っており被爆を免れ、私と祖母と姉（長女）は自宅で被爆、下の姉（次女・女学校一年生）は勤労奉仕のため学校に行き、同級生と被爆しました。

私は朝食を済ませるとすぐ近くの広場へ遊びに行きました。しばらくして突然目の眩むような光が差し、「ドーン」という轟音とともに強烈な爆風が吹いてきて、私は吹き飛ばされて気を失ってしまいました。

どのくらい経過したのかは分かりませんでした。目が覚めた時には、快晴だった空がうす暗く、辺りは煙に包まれ、よく見えない状態でした。周りの家は倒壊しており、火災も起きていました。景色が一変して、夢の中にいるようで何がなんだか分からない状態でした。

正気に返って周りをよく見渡しましたが、自分がどこにいるのか分かりません。身体中が痛くて立ち上がれず、足の太ももにはガラスの破片が刺さっていました。早く家に帰り祖母や姉に会いたい一心でやっとのこと、起き上がり、自宅を探しましたが、あまりの変わりように方角が分からず、見つけることができませんでした。疲れ果ててうろうろしているところを近所の知人に助けられ、保護されました。家を探している時に、泥の混じった雨が降ってきました。これは後に「黒い雨」と言われ放射能を大量に含んでいる雨です。

私はその後成長の過程では体が弱く様々な病気をしましたが、振り返ってみると原爆の影響が少なからずあったのだらうと思っています。

この原爆では、祖母と姉（次女）が亡くなりました。特に広島女学院1年生だった姉は同級生350人と引率の先生とともに爆心地から1キロの雑魚場町で勤労奉仕の建物疎開作業中に被爆し、全員が死亡しました。

父は翌日帰省し姉を探しに勤労奉仕の現場に行きましたが、現場のあまりにも酷い惨状に息を飲んだそうです。通常の神経では到底耐えられないほど酷く、

どの遺体もまともなものはなく、男女の区別もつかない状態でした。父は姉の遺体を見つけられず、姉に申し訳ないと悔やんでいました。

子ども達に伝えたいこと

戦後75年が経ち戦後生まれが大半を占める時代になり、悲惨な戦争や原爆の記憶が薄れています。このような時こそ再び戦争を起こさないために過去の現実を知らなければなりません。

被爆者の平均年齢も83歳を超え被爆体験を話せる人が少なくなっています。残された時間はあまり多くはありません。つらい体験を話すのはとても嫌なことですが、次世代に継承していかなければならないと思っています。

私達の体験を、二度と戦争を起こさないこと、再び被爆者を作らないことのために聞いてください。平和というのは日常の生活や勉強が当たり前に行えることだと私は思っていますが、その当たり前のことが出来なくなるのが戦争です。子ども達には、平和や命の大切さを理解するために、たくさん話を聞き、経験をして、友達とよく議論をしてもらいたいと思っています。